藍野大学紀要，第 36 巻，2023，pp. 35-43

〔**Practical Report**〕

Students' Nursing Management Learning from Hospital Relocation Experience in Integrated Nursing Practice

Reiko Nakano*, Ayumi Nishigami* and Yuki Manabe*

* Aino University

Abstract

The purpose of this study was to identify nursing management learning of our fourth-year students as part of their Integrated Nursing Practicum through the hospital relocation. The reports of 82 students who cooperated with the study were subjected to a quantitative text analysis using KH Coder. The total number of extracted words in the reports was 51,247 words and 1,233 sentences. "Patient" was the most frequently occurring word (1,069 times), and nine words including "hospital," "transfer," and "relocation" appeared over 200 times. Co-occurrence network analysis revealed 11 subgraphs, with subgraph 1 consisting of the 9 words "patient," "hospital," "transfer," "relocation," "nursing," "do," "learn," "safety," and "think," and the other 10 subgraphs consisting of 2 to 4 words. The results of the role-specific correspondence analysis showed that the patient transfer students in the old and new hospitals were characterized by words such as "patient transfer," "name matching," "misidentification," "prevention," and "personal belongings," which focused on the role they were in charge of. The students gained a broader perspective on nursing management by participating in the actual relocation preparations, collaboration, and safety measures across the hospital organization.

Key Words: integrated nursing practice, hospital relocation, nursing management, multidisciplinary

〔実践報告〕

統合看護学実習における病院移転体験による学生の看護マネジメントの学び

中　野　玲　子*，西　上　あゆみ*，真　鍋　由　希*

【要　旨】
本研究の目的は，本学4年次生が統合看護学実習の一環として体験したA病院の新築移転体験を通しての看護マネジメントの学びを明らかにすることである．研究協力の得られた82名の学生のレポートを，KH Coderを用いて計量テキスト分析を行った．レポートの総抽出語51,247語，1,233文章であり，頻出語は，「患者」が1,069回で最も多く，「病院」「移送」「移転」など9単語が200回以上出現していた．共起ネットワーク分析の結果，11のサブグラフが検出され，サブグラフ1は「患者」「病院」「移送」「移転」「看護」「行う」「学ぶ」「安全」「考える」の9単語，その他の10のサブグラフは，2〜4単語で構成されていた．学生の役割別の対応分析の結果，旧病院および新病院の患者移送担当者は「申し送る」「名前」「誤認」「防止」「荷物」など，担当した役割に注目した特徴的な語が抽出された．学生は，病院組織全体としての移転の準備，協働，安全対策などの実際を体験することで，看護マネジメントを広い視野で考えることができた．

キーワード：統合看護学実習，病院移転，看護マネジメント，多職種

Ⅰ．緒　　言

我が国の看護基礎教育における教育課程の変遷は，医療・看護を取り巻く社会情勢の変化を反映し，質の高い看護の提供を目指す時代のニーズを見据えて改正が行われている．2009年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則が改正され，より臨床に近い形で学習し，知識・技術を統合させることを目的とした統合分野として「看護の統合と実践」が設けられ，看護をマネジメントできる基礎的能力，医療安全の基礎的知識の習得，複数患者の受け持ちおよび夜間の実習などが明文化され，統合分野の講義や実習が開始された．看護基礎教育における臨地実習は，学生が学修した看護の専門的な知識・技術・態度の統合を図りつつ，実践へ適応する能力を育成することを目的に基礎看護学実習，各領域別実習，そして最終学年で学びの集大成としての統合看護学実習を行っている．

卒業後の臨床現場へのスムーズな適応を目的とする統合看護学実習に関する実習内容や方法，評価など，多くの研究報告があるが，2020年2月以降，新型コロナウィルス感染症が拡大しコロナ禍の状況が続く中，看護基礎教育の現場も大きな影響を受け，臨地実習も様々な制約の中で行われてきた．太田ら（2021）は，新型コロナウィルス感染症の拡大により学内での実習となった統合看護実習後の学生の評価より，面接による内省，他者の経験からの学びなどの学習効果があったが，課題としてICT環境整備，看護技術演習やグループワークの困難さなどを報告している．また，野

* 藍野大学

口ら（2023）は，病棟実習とオンライン実習の学びを比較し，各実習形態の特性を活かし，学生が効果的に学べるための看護学実習教育の教育環境を整える試みが必要であると報告している．

本学においても，新型コロナウィルス感染症発生から２年間は学内のみでの統合看護学実習を行い，2021年度は同じ実習目標で，模擬電子カルテを活用し学生が２名の患者を受け持ち，その２人目はグループで同じ患者を受け持って看護過程を展開した．患者の情報収集に関しては実践的な取り組みができ，優先順位を考える姿勢も見られた．また，マネジメントや医療安全の講義を行い学びをレポートにまとめたが，演習室での実習は臨床を想定するには程遠い環境であり，実際の実習指導者とのディスカッションも実施できず，学生の緊張感の維持が今後の課題であった．

そして2022年度，実習時間や学生配置数などの制約のある状況下，臨地での統合看護学実習を行ったが，その実習の一環として本学の領域別実習病院の一つであるＡ病院の新築移転を体験する機会を得た．病院の新築移転事業は，組織マネジメントや医療安全など，多くの視点から看護管理を学ぶ貴重な機会と考えられる．そこで，本研究は，学生が病院移転を体験することにより何を学んだのかを明らかにし，今後の看護の統合と実践に関する教育を考える示唆を得ることを目的とした．

Ⅰ．研　究　方　法

1. 調査期間：2022年５月17日～10月31日
2. 調査対象：2022年度藍野大学医療保健学部看護学科にて統合看護学実習を行った４年次学生92名
3. データ：病院移転実習終了後に提出された学生の課題レポート「病棟移転体験による看護マネジメントの学び」
4. 調査方法：質的帰納的研究
5. データ収集方法：提出された課題レポートをコピーして学生に返却し，研究参加協力を依頼し，学籍番号と氏名部分を切り取るか，もしくは黒塗りした無記名のレポートを，レポート回収箱を設置し収集した．レポートの記述に個人が特定されるような記載があれば特定できないように，また提出されたレポートはナンバリングをして処理した．
6. 分析方法：研究協力の同意の得られた学生のレポートの記述をKH Coderを用いて計量テキスト分析を行った．

Ⅱ．病院移転実習の概要

今回の病院移転実習は，Ａ病院の看護部長から本学看護学科へ病院移転の学生ボランティアの協力要請があり，看護学科で検討し統合看護学実習の一部として実施することを病院側に提案し，病院看護部長と相談の結果，実習としての実施が決定した．

統合看護学実習の目標は，① 看護におけるマネジメントの概念を理解できる，② 保健医療チームの一員としてリーダーシップ，メンバーシップを発揮し，役割・責務を理解することができる，③ 複数の患者を受け持つ多重課題において，それぞれの個別性・優先順位を考えることができる，④ 他職種との連携・協働を理解することができるの４つであるが，今回の実習では①②④の目標に関して学ぶ機会になると考えた．

そして，大学・病院間で検討の結果，表１のようなスケジュールで実施することとした．実習準備として，学生は事前に学内において，病院看護部長による新病院のコンセプトや移転に関する講義を受け，その後，

表１　病院移転実習に関するスケジュール

日 時	項　目	講義内容および実習の実際
5 /17（火） 2時間	病院看護部長による講義	新病院のコンセプトや概要 移転準備，患者移送シミュレーション結果
5 /24（火） 2時間ずつ	新病院見学	午前午後，3グループずつ合計6グループに分かれ，看護副部長から病院の構造・設備などの説明を受けながら見学した．
6 / 1（水） 6時40分から15時	病院移転実習	6 時40分，新旧病院に分かれて集合した． 7 時，全体朝礼に参加した． 入院患者214名を想定，学生を含む職員350名で対応した． 8 時，患者移送開始，4分毎に病棟別に患者をグループ単位で移送した． 14時半，移転終了後の病院職員の集いに参加した．
6 / 8（水）	課題レポート提出	課題レポート「病院移転体験による看護マネジメントの学び」1,000文字程度をまとめた．

表2　学生のグループ別役割

班	実習場所	班別役割	患者移送範囲や行動	学生数
①	旧病院	患者送り出し	病棟からエレベーター前まで	14名
②		旧病院内患者移送	エレベーターから旧病院出口まで	10名
③	病院間	病院間移送	旧病院出口から新病院玄関まで	10名
④		病院間移送	旧病院出口から新病院玄関まで	10名
⑤		病院間移送	旧病院出口から新病院玄関まで	5名
⑥	新病院	新病院内患者移送	新病院玄関から新病棟まで	10名
⑦		患者受け入れ	新病棟での受け入れ	14名
⑧		ベッド搬送	旧病院からのベッドを新病院玄関から新病棟へ搬送	10名
⑨		ベッドメイキング	新病棟へ搬送されたベッドのベッドメイキング	9名

新病院の見学を行った．6月1日移転当日は，病院職員とともに患者の準備や移送，備品搬送など，旧病院，新病院，および病院間移送班の7つの役割別9班（①～⑨）に分かれ（表2），病院職員とともに行動して病院移転実習を行い，課題レポート「病棟移転体験による看護マネジメントの学び」を1,000文字程度にまとめた．この課題レポートは，統合看護学実習の評価対象とした．

病院移転実習は，当日7時に全体朝礼，8時に患者移送を開始，14時半から移転終了後の病院職員の集いに参加し，実習を終了した．入院患者数は214名を想定し，学生92名を含む職員350名で対応した．入院患者の移送は，病棟別に，いくつかの患者のグループを編成し，京都府内のB市内の旧病院から新病院まで，約2.6キロの距離を車で8分間かけて，4分毎に移送が行われた．新病院では病棟および診療科編成が変更され，患者は新たな体制の病棟に移った．

Ⅲ．倫理的配慮

本学研究倫理委員会の承認（承認番号10R-22-0007）を得て実施した．

ワードで作成された学生のレポートをデータとして使用することとした．研究参加協力の同意の得られた学生のレポートは研究者が判別できないように，学籍番号と氏名の記載部分を切り取るか，もしくは黒塗りされたものとし，内容に個人が特定される記載があれば特定できないように処理を行った．

学生への説明では，研究協力の意思は任意であり，成績などには無関係であり，研究に参加しなくても学業への不利益は一切生じないこと，研究以外に使用することはないこと，研究結果は学会などで発表すること，レポート提出を持って同意したとみなすこと，得られたデータは本研究以外の目的には使用せず，研究者が厳重に鍵のかかる場所で研究終了後5年間保管し，その後消去することを説明し，研究参加協力を得た．

Ⅳ．結　　果

当該実習を行った学生92名のうち82名から研究参加協力の同意を得ることができ，回収率は89.1%であった．

1. 抽出された語の分析

レポートの総抽出語51,247語，1,233文章であった．頻出語は，「患者」の出現回数が1,069回で最も多く，以下「病院」「移送」「移転」「看護」「行う」「学ぶ」「安全」「確認」「病棟」が200語以上出現していた．その後，「考える」「情報」「班」「必要」「対応」「ベッド」「医療」「時間」「役割」が100語以上抽出され，患者の情報を確認し患者を安全に移送する役割に関する内容が確認できた．出現回数20以上の語を表3に示した．

実習前の病院看護部長の講義および病院見学に関連する語として，「見学」27回，「講義」24回，「部長」13回，「設備」11回，「イメージ」8回，「構造」6回を抽出した．KWICコンコーダンスのコマンドでこれらの文脈を探ると，病院の規模や機能などの他，設備構造に関して，ナイチンゲール看護の基本とする環境整備，感染予防，安全対策として空調管理の工夫，汚物処理室パルプ粉砕機マセレーターの導入，ベッドサイド情報端末ユカリアタッチの導入など，写真やスライドを用いた具体的な講義内容が記載されていた．

2. 共起ネットワーク分析

共起ネットワーク図は，繋がりの強い語のまとまり（サブグラフ）で分けられ，語間の繋がりを示すJaccard係数が大きいほど繋がりが大きく，円が大き

表３　抽出語とその出現回数

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
患者	1,069	スムーズ	57	様々	30
病院	616	状況	56	リスク	29
移送	558	物品	56	分かる	29
移転	368	大切	55	本人	29
看護	352	連携	55	問題	29
行う	339	見る	54	連絡	29
学ぶ	281	工夫	51	タイム	28
安全	250	把握	51	確保	28
確認	234	病室	51	使用	28
病棟	204	荷物	50	担送	28
考える	173	場合	49	ストレッチャー	27
情報	141	決める	47	区分	27
班	139	シミュレーション	46	見学	27
必要	120	実際	45	行える	27
対応	118	車	45	行動	27
ベッド	107	環境	43	分担	27
医療	103	指示	42	変化	27
時間	101	入る	42	繋がる	26
役割	101	送り出す	41	行く	26
感じる	98	場所	40	持つ	26
重要	96	それぞれ	39	乗る	26
状態	91	リーダー	38	全員	26
誤認	90	対策	38	不安	26
管理	89	効率	37	理解	26
準備	89	人員	37	ルート	25
実習	86	声	37	体調	25
事前	82	スケジュール	36	伝える	25
担当	80	氏名	36	同士	25
スタッフ	76	徹底	36	特に	25
感染	75	ネーム	35	学生	24
マネジメント	74	起こる	35	講義	24
申し送る	74	業務	35	作業	24
計画	71	バンド	34	思う	24
前	69	医師	34	事故	24
急変	68	運ぶ	34	自身	24
体験	68	受け入れ	34	全て	24
防止	68	組織	34	多く	24
移動	67	酸素	33	点滴	24
今回	67	可能	32	バイタルサインサイン	23
配置	67	書く	32	学び	23
共有	66	責任	32	京都	23
職員	65	防ぐ	32	個人	23
搬送	64	安心	31	知る	23
エレベーター	63	円滑	31	入院	23
全体	62	記載	31	方法	23
人	61	実施	31	名乗る	23
有無	61	リスト	30	様子	23
名前	60	事項	30	済生会	22
関わる	59	職種	30	順番	22
当日	58	注意	30	他	22

いほど語の出現頻度が高いことを表している．出現パターンの似通った語を線で結び，出現言語同士の類似性を視覚化したスパニングツリーを図 1 に描画した．

1）共起ネットワーク分析の結果，11 のサブグラフが検出された．サブグラフ 1 は，「患者」「病院」「移送」「移転」「看護」「行う」「学ぶ」「安全」「考える」の 9 単語の共起で構成されていた．サブグラフ 2 は，「感染」「申し送る」「有無」「荷物」の 4 単語の共起で構成されていた．同じくサブグラフ 5 は，「準備」「事前」「当日」「シミュレーション」，サブグラフ 10 は，「確認」「誤認」「防止」「名前」のそれぞれ 4 単語の共起で構成されていた．また，サブグラフ 3 は，「病室」「入る」の 2 単語の共起で構成されていた．同じくサブグラフ 4 は，「マネジメント」「体験」，サブグラフ 6 は，「状況」「把握」，サブグラフ 7 は，「前」「エレベーター」，サブグラフ 8 は，「実習」「今回」，サブグラフ 9 は，「対応」「急変」，サブグラフ 11 は，「情報」「共有」のそれぞれ 2 単語の共起で構成されていた．

2）サブグラフ 1 の「看護」と「学ぶ」はサブグラフ 4 の「マネジメント」と関連し，サブグラフ 1 の「移転」はサブグラフ 4 の「体験」およびサブグラフ 8 の「今回」「実習」と関連していた．またサブグラフ 1 の「患者」と「行う」はサブグラフ 10 の「確認」と関連しており，サブグラフ 10 の「確認」「防止」「名前」「誤認」は相互に関連していた．

3.　学生の役割別の対応分析

表 2 の 7 つの班別役割を外部変数として対応分析を行った，縦軸と横軸の 0 を結んだ場所が原点となり，原点付近に示されている語は共通して出現していた語であることを示している．原点から離れるほど役割の違いによる出現の差異が大きく，特徴的な語であることを意味する 2 次元のプロットを図 2 に表示した．原点付近に示された語は，頻出回数が 500 回以上と多かった「患者」「病院」「移送」の他，「時間」「確認」「情報」が共通して出現していた．

第 2 班「旧病院内患者移送」は，病棟別グループ別の患者の荷物を整理・点検し，患者の一般状態の観察や申し送り票の記載も含め患者の準備を行い，適切な移動手段にて病棟エレベーターから旧病院の出口玄関までの移送と，病院間移送班への患者の申し送りを行った．第 6 班「新病院内患者移送」は，第 2 班と同じく新病院入口玄関から病棟への患者移送および新病棟スタッフへの患者の申し送りを行った．この 2 つの患者移送担当者のレポートから，「申し送る」「名前」「誤認」「防止」「荷物」など，患者の荷物や名前を間違えないように確認し次のグループに申し送るという患者移送を安全に実施する役割に注目した特徴的な語が抽出された．

また，第 7 班新病院新病棟での「患者受け入れ」は，旧病院よりも 1 病棟当たりの病床数が少なく，診療科編成も変更された新たな体制で患者を受け入れた．これらの行動には，患者移送にかかわる各班のメンバー

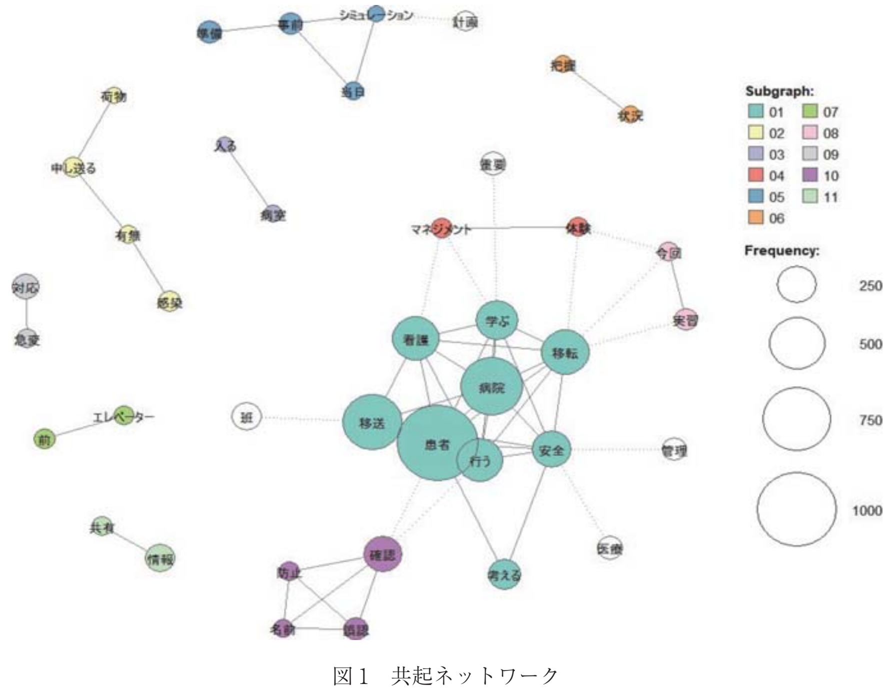

図 1　共起ネットワーク

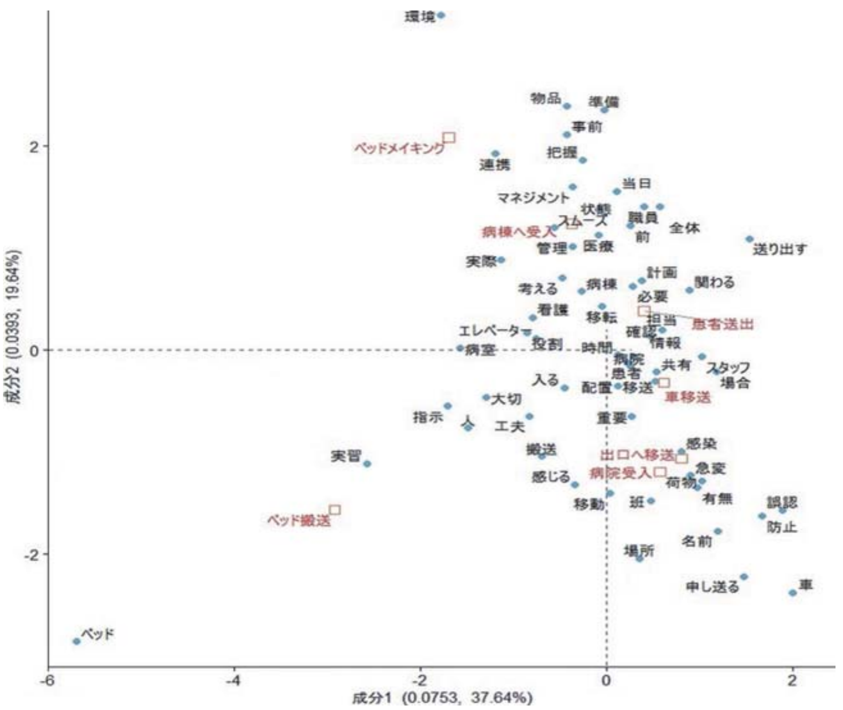

図 2　役割別対応分析

間，および各班間の患者情報の把握や共有，連携など，多職種の連携や協働，マネジメントの考え方が必要であり，「連携」「把握」「マネジメント」「スムーズ」など，同じく担当した役割に注目した特徴的な語が抽出された．

V．考　　察

1．データの分析方法

分析する際には，単独では意味をなさない構成要素（助詞や副詞）は除外し，強制抽出する語は指定していないが，事前に文章上の語の揺れを修正した．共起の強い語の結びつきを示すサブグラフは，KWIC コンコーダンスのコマンドで抽出語の用いられていた文脈での意味内容を確認し，レポートからの学びの解釈の妥当性が確保できると考えられるが，今回この方法による分析を行っていない．

対応分析では，学生の担当した各班の役割を外部変数に設定し，抽出語の対応分析を行った．学生に本研究の分析対象であるレポート課題を課した際には，「病院移転体験による看護マネジメントの学び」を 1,000 字程度にまとめることを説明したのみであり，無記名のレポートの学生の役割がどの班であったか記載されていない場合は，複数の研究メンバーにより文脈から判断し分類した．結果に述べたように学生の担当した役割に注目した特徴的な語が抽出され，看護マネジメントの学びがレポートに表現されたと推察したが，今回の分析ではこれ以上には広がらない．学生の役割別の対応分析においても，差異が顕著な語に注目して，KWIC コンコーダンスを用いて役割の違いによる学生の学びの特徴についても分析できると考える．

しかし，KH Coder を用いての分析の利点は，研究者の意図する語を操作しないで，客観性が高いことである．強制語句を意図的に抽出することは，客観性を低下させることになるのではないかと考える．今回の結果だけでは，語句が多い，繋がりが強いということが学びを裏付けることになるのか難しい課題である．病院移転実習の後に 2 週間の病院での統合看護学実習を実施したが，病院実習での学びと関連づけて分析するなど，学生の学びをどのように評価するかは今後の課題である．

2．看護マネジメントの学び

抽出された語やそれらの語の関連性，および学生の担当した役割に注目した特徴的な語が抽出され，担当した班の役割行動を通して各班内の多職種との連携や，班同士間の連携など，気づいたり実感した看護マネジメントの学びがレポートに表現されたと推察する．実習前の講義では，新病院移転のコンセプトや病院職員による移転シミュレーションの実施やその課題などを

理解し，新病院のイメージを持って積極的に病院見学に臨むことができたと考える．これらの実習前の講義や病院見学を行うことで新病院に対する興味関心が高まり，病院移転実習に臨むことができたと考える．

学生は配置された班のメンバーの一員として，看護師，医師，理学療法士および事務職などと一緒に行動することで，予定された時間内に計画的に患者に提供される一連のケアを目の当たりにし，病院全体の多職種それぞれがメンバーシップを発揮し一丸となって，チームとして患者を安全に移送する現場を体験した．学生は，それらの実際の体験を通して，病院組織全体としての移転の準備，協働，安全対策など看護マネジメントの実践を身体で感じとり体得することができたと考える．通常の統合看護学実習とは異なる実習形態ではあったが，看護マネジメントの視野が広がり実習目標の達成につながる多くの学びを得ることができ，このような特別な企画へ参加する意義があったと考える．

病院移転実習の振り返りのため，実習当日の移転終了後の病院職員集い前の待機時間に，役割の異なるグループメンバーの行動の実際や考えたことを報告し合う時間を設けた．しかし 3 週間後に病院での統合実習を控えていたこともあり，その時間以外には今回の実習内容に関する学生全体での学びを報告し合う機会を設けなかった．病院移転という貴重な機会を体験して，学生間での実習後の学びを伝え合う方法の検討が必要であった．

岩坂（2017）は，統合看護学実習に新たにジョブシャドウイングを導入し，学生は管理者やリーダー看護師の業務の実際から未知なるそれぞれの役割・機能を理解し，受け持ち看護師の行動からはメンバーシップ力とその発揮を学びとっていたと報告している．今回の病院移転の体験は計画してできるものではないが，今後も新たな実習内容や方法などについて検討し，学生の臨床現場への適応力や行動力を高めることにつながる統合看護学実習を構築することが課題である．

Ⅵ．結　　論

移転実習前の講義や新病院見学により，学生の病院移転に対する関心が高まり，実習後のレポートの看護マネジメントに関する多くの語の抽出につながった．担当した班の役割に注目した特徴的な語が抽出されたが，学生の学びを裏付ける根拠は明らかではない．しかし，学生は病院の全職員が一丸となって綿密な準備のもと実践された組織的な患者移送の体験を通して，多職種の協働，患者安全の重要性など看護マネジメントの実践を体得したと考えられ，通常の実習とは異なる実習形態ではあったがこのような特別な企画に参加する意義があった．

謝　辞

本研究の実施にあたり，病院移転実習にご協力をいただきました A 病院の看護部長はじめ職員の皆様に心より感謝申し上げます．

付　記

本研究は第 43 回日本看護科学学会学術集会にて発表したものを加筆，修正しまとめた．

本研究に関して開示すべき利益相反関係にある企業などはない．

文　献

有馬明恵（2021）．内容分析の方法第 2 版．ナカニシヤ出版．

樋口耕一，中村康則，周景龍（2022）．はじめてのテキストマイニング．ナカニシヤ出版．

岩坂信子，尾形裕子（2017）．継続統合看護学実習におけるジョブシャドウイング導入による看護マネジメントに関する学生の学び．北海道文教大学研究紀要．第 41 号．

岩﨑淳子，武藤英理，則武翔（2023）：統合実習における学生の学びと今後の課題．朝日大学医療保健学部看護学科紀要，第 9 号，28-32．

厚生労働省（2004）．新人看護職員の臨床能力の向上に関する検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-6.html.（閲覧日 2023/10/20）

厚生労働省（2007）．看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html（閲覧日 2023/10/20）

厚生労働省（2019）．看護基礎教育検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf.（閲覧日 2023/11/10）

近藤恵子，小林たつ子（2017）．複数患者受け持ちに関する学生の学びと困難をふまえた統合実習指導の課題．長野県看護大学紀要，19，33-44．

日本看護系大学協議会（2018）．看護学士課程教育におけるコンピテンシーと卒業時到達目標．https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf.（閲覧日 2023/12/10）

日本看護系大学協議会（2019）．看護学教育向上委員会看護学実習ガイドライン．https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf.（閲覧日 2023/11/10）

野口佳美，谷村千華，片岡英幸（2023）．COVID-19 影響下での成人（慢性）看護学実習における病棟実習とオンライン実習の学びの比較 ―― テキストマイニ

ングによる課題レポートの分析から――．日本看護科学学会誌，43，183-193.
太田晴美，大崎真，早坂笑子（2021）．新型コロナウィルス禍の学内統合看護実習評価 ――学生アンケート結果から――．東北文化学園大学看護学科紀要，第10巻第1号，27-42.
太田節子，吉崎文子，藤野みつ子他．統合看護学（看護管理学）実習における実習内容と学生の学び．滋賀医科大学看護学ジャーナル，9(1)，6.
山崎さやか，小林美幸，吉岡睦世他（2023）．テキストマイニングによる看護学生の看護総合実習前後のレポート分析．健康科学大学紀要第19号．27-35.
山下真紀，岩崎淳子，武藤英理他（2020）．本学における統合実習の見直しと今後の課題．朝日大学医療保健学部看護学科紀要，第6号，46-51.